
限りなく僕を高めてくれる王女

B u g o m i e l

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限りなく僕を高めてくれる王女

【Nコード】

N5243Z

【作者名】

Bugomiel

【あらすじ】

ゴシック時代のヨーロッパ。

アドリア海沿岸のアルベルジェッティ王国の王子ユージーンのもとへ、隣国から嫁いできたアレグラ。

美しく、その上武術もたしなむアレグラは、義父ディビッド王を始めアルベルジェッティの人びとを魅了する。

実は武術の苦手なユージーンだが、アレグラは彼を支え、王子としてのユージーンの地位を確立させて行く。

読書家のユージーンは、やがて飛行物体の研究の結果、魔術を操る

王子とあがめられる。

王女アレグラ（前書き）

主な登場人物

ユージーン：アルベルジェッティの第一王子

アレグラ：フィオレンティーナの王女だった。今はユージーンの妃

ディビッド：アルベルジェッティの王

クラウディア：王妃

デルフィーナ：八年前に亡くなったアルベルジェッティの王女

カイル：第二王子

カプリシオーソ：結婚祝いに王がアレグラに贈った馬

パスクアーレ：王の秘書官

アルノ公爵：総理大臣

王女アレグラ

「おお、これは」

アレグラは眼下に広がる風景に思わず息をのんだ。

「まずは初めての感想を聞こう。アレグラ、どうかな？」

そこはアルベルジェッティ王国が見渡せる高い山、フォルリ山の頂だった。振り向けばこの国の国境と、その向こうに連なる荒れ地が見下ろせた。

「見張りを置くには絶好の場所ですね。義父上^{ちちじょう}」

デイビッド・アルベルジェッティ王は、やはりという顔で微笑した。長男、ユージーン王子の嫁アレグラを初めてこの山に連れて来たのだが、彼女なら、この美しく広がる王国の赤い屋根やその向こうに広がる紺碧のアドリア海よりも、この頂上の地の利に目を付けるだろうと思っていた。海からでも、陸からでも、この国に攻め入ろうとする者は、誰であろうとフォルリ山の頂上からの監視を逃れるわけにはいかなかった。

デイビッド王の見解もアレグラと同じで、この頂上には既に24時間態勢で見張りがおかれていた。

アレグラは幼い頃から馬が好きで、歩き始めるとほぼ同時に乗馬も習い始めた。父親のフィオレンティーニ王から許可を得て、將軍について乗馬の指導を受け、あげくは剣の手ほどきも受けていた。身軽でそこらの兵士よりは筋がよく、練習試合の相手がなかなか見つからないほどだった。

乗馬も、馬を一目見て僕^{しもへ}にしてしまう才能を持ち、どんな荒馬でも乗りこなせるようになって、10代の始めには將軍の助手としていつも訓練のときは横についていた。戦いにこそ参戦させてはもらえなかったが、彼女は何をするにも作戦を立てて事に当たる性格が身に付いてしまっていた。

したがって、普通の15歳の王女なら、ここからの絶景とも言える美しい景色に感動するところだが、彼女の場合はむしろ、戦いにおける重要地点としての意味に関心を示したのだ。

デビッド王は、そのいかにも頭の良さそうなターコイズブルーの瞳にじゅうぶん満足していた。彼女なら、武器を持つことの嫌いなユージーンを補佐してくれるのではないだろうか。

ユージーンも決して頭が悪いわけではない。幼い頃から参謀会議では奇抜なアイデアを提案して、味方の勝利に協力したことも何度もあった。しかし、剣の腕は弟のカイルより劣っている。ユージーンの名誉のため公の場で二人が剣を交えることは無いが、両方と相手をしている王や將軍の目には明らかだった。どちらかと言うと物静かで書物を紐解いていることの多いこの長男に王位を譲ることが、デビッド王としては少し不安ではあった。しかし、アレグラと協力して戦いを誘導し、業績を上げれば誰も不満は無いであろう。もともユージーンは政治経済には長けていて、国を統治する力は充分にあった。

普段は気の荒いカプリシオーソが、ヒヒンと鳴き声を上げ、珍しくアレグラに首をこすりつけようとしてくるので、彼女はそれをなだめようとパタパタと首筋を軽く叩く。カプリシオーソは首を一振りして、ちゃんと向き直った。

さすがだ。愛情を込めて接しているが、決して甘やかしたりはしない。

この荒馬を、一週間もしないうちにここまで手なずけられるのは、

おそらく彼女だけだろう。

結婚の祝いに、デイビッド王が彼女に与えた美しい白馬。一点の曇りも無い白い馬。だが、恐ろしく気位の高い馬でもあった。デイビッド王とアレグラだけは、カプリシオーソに振り落とされたことが無い。彼女がこの白馬に乗って草原を駆け抜けけると、その足並みはまるでペガサスに乗って飛んでいるように思えるのだった。

――

昨日、王の誘いを受け、三人で遠乗りに出かけた時、ユージーンはこの美しいアレグラが自分の物だとはまだ実感できないでいた。彼女はもつとずっと高く、手の届かないところにあるもののように感じていた。

デイビッド王が満足そうに笑みをたたえてアレグラを見ている。今まで自分が父をこんなにも手放して満足させたことがあるだろうか。特に他の兄弟と比べて差別されているとは思わない……。いや、兄弟の誰も、こんなにも父親に愛されていないのではないか。

デルフィーナ…… 八年前、わずか七歳にして事故で亡くなってしまった妹。

デイビッド王の秘蔵っ子だった。

奇しくも同じ年のアレグラに、今は亡き愛娘の面影を見ているのだろうか。誰からも愛された天使のような子だった。確かにユージーンも、アレグラにはどこか妹を思い起こさせるところがあると思っていた。

もちろん、誰もデルフィーナのことを八年間思い続けていたわけではない。ただ、アレグラを初めて見た時、誰しも心の奥にしまっていたデルフィーナのことがよぎったのは事実だった。

17歳のユージーンには、現実にも、目の前を元気良く馬と走り回

るアレグラの方が、ずっとずっと力強く心に響いていた。しかもアレグラは、妹などではない。まさに彼の妻なのだ。

それは、デイビッド王にも手出しはできない、紛れもない事実だった。

ユージーンは優越感をこめ、父の後ろ姿に向けて静かにフツと笑った。

四日前までは会ったことも無かった彼女が、今はユージーンの心を大きく占めていた。

王子の結婚式

四日前、アルベルジェッティでは盛大な儀式が行われていた。

街の中心に近いサン・ヴィターレ聖堂で、アルベルジェッティ国王、デビッドの第一王子ユージーンと、隣国フィオレンティーニ王国の王女アレグラの結婚式が盛大に執り行なわれていた。

サン・ヴィターレ、外観は重厚なビザンチン様式の聖堂の中は、驚くほどきらびやかなモザイクで飾られた教会だった。金色がふんだんに使われたモザイクは、高貴な神や牧歌的な自然の物語を綴っていた。黄金を引き立てる高貴な深緑、淡い海の緑、深い赤などがこの上ない色彩のハーモニーを生み出していた。その壮大な大きさとモザイクの芸術は、人びとの信仰の厚さを象徴している。

入堂の時、ユージーンは入口近くの席でアレグラを待ち、司祭に先導されて祭壇までアレグラと一緒に進む手はずになっていた。

ユージーンの待っている位置からは、司祭に連れられて教会の入口まで階段を上ってくるアレグラが見えたのだが、彼女が一段づつ脚を運ぶ度に、重いケープの裾が開いて、膝の形が絹のウエディングローブに浮かぶのが、可愛らしいようでいて艶かしく、ユージーンの心を波立たせた。

花嫁と花婿が祭壇の前に進むまで、全員起立して二人を迎える。

デビッド王はアレグラがユージーンには過ぎた嫁ではないかと心の隅で思っていたのだが、二人で司祭に礼をした時に、一度も練習などしたわけではないのに呼吸が合っており、頭を下げる長さが同じだったことに、式典の滞りない未来を感じて満足していた。しかもユージーンの誓いの言葉が、いままでのどんなおごりかな儀式よ

りも堂々としてしていることに、息子の力量を思い知らされたようで、少なからず驚かされていた。

司祭による祝福の祈りの後、ユージーンがアレグラのヴェールを持ち上げる、静粛なはずの聖堂のあちこちから思わず「ほうっ」というため息が聞こえた。

彼女のたぐいまれなる美しさは、人びとの胸をときめかせた。波打つ金色の髪で縁取られた真珠色の肌、深いターコイズブルーのしつとりとした瞳で見つめられると、誰もが我を忘れてしまう。唇もサクランボのように輝いていた。

デイビッド王の横で、クラウディア王妃も思わず息をのんだのを彼は聞き逃さなかった。絶世の美女と誉れ高いクラウディアをうならせるとは相当なものだ。

ユージーンはときめきを胸にしまいこみ、ヴェールを持ち上げると彼女の？に軽くキスをして、アレグラの顔をうつすらと赤く染めさせた。いかにも女性に慣れしているデイビッド王でも、こうまで冷静にできないのではないだろうか。

ユージーンがアレグラに魅了されていなかったわけではない。ただ彼は、必要な時に心を切り離して集中する術を心得ていただけだ。指輪の交換、証書への署名を滞り無く行ない、聖歌によって式典は無事終了した。

式典の後のパレードで、本来ならばアレグラは裾の長いドレスを着て馬車に乗るところだが、ギリシャの神のように仕立てられた衣装で馬にまたがり、ユージーンと並んで二頭の馬に乗って国民の祝福を受けた。さすがにこのときはまだカプリシオーソには会ったことも無かったので、他の馬が使われた。晴れの舞台で、王子の妃が民衆の前で落馬でもしたら大変なことになる。

民衆の反応は驚くほど盛り上がっていた。

二年前にユージーンの姉コンスタンツァが北の国へ嫁いだ時は、こんな騒ぎは起こらなかった。王女が旅立つことと、王女を花嫁として迎えることには大きな違いがあるが、まあ正直に言って、コンスタンツァとアレグラとは輝きの度合いが違う。実は、母親似のユージーンの方が姉よりも妖艶さにあふれていた。透き通るような金髪を長く伸ばし、後ろになびかせている。目を伏せると睫毛が影を落とし、高貴な雰囲気には溢れていた。もし花嫁がこれほどに輝く美女でなかったら、花婿の美しさの方が際立っていたかもしれない。

美しく強いアレグラに、人びとは希望を抱き、夢を膨らませた。少なくともフィオレンティーニと戦争をすることはもう無いはずだ。フィオレンティーニはアルベルジェッティに等しいとも言われる大國だった。それが敵になる恐れが無くなり、それどころか他國との戦争の際に味方になるというのは、国民にとって大きな希望だった。だから、この婚礼に恨みを持つ者はまずいとみて、馬車に乗らなくてもよいという結論に達した。

「皆に手を振ってあげなさい」

ユージーンが耳元でささやくと、アレグラは右手を上げて静かに手を振った。民衆からは地響きのような歓声が沸き上がってきて、若い二人を戸惑わせた。

これはただの結婚式なのだ。デイビッド王はまだ39歳、彼の統治力にはみんなが信頼を寄せていた。王の引退はまだまだ先のこと、若い二人が表立って執り行なう出番はまだ少ない。

銃のない時代だったが、それでも弓矢で狙われる危険性はある。そこは、かねてから訓練をつんで来たアレグラならば、身を守ることができるだろうということで許されたパレードだった。もっとも、

たとえ馬車に乗っても、祝い事用のものは屋根の無いオープンスタイルだったから、狙われる危険はさほど変わりはないかもしれない。もともとパレードの目的とは花嫁を国民に親しみを持たせることで、その意味ではこれ以上無いほどに開放された行進だった。

彼女が横にすることが、自分の威力をこれほどに増すことの意味を、ユージーンは深く心に刻んでいた。

婚礼の宴

結婚式から一週間後、宮殿ではユージーンとアレグラの結婚披露の宴が行なわれていた。

国中の貴族が宮殿に集まり、二人に祝いの言葉を述べる。

庭は飾り付けられ、すべての噴水は勢い良く水しぶきを上げていた。のどかな春の日、数多くのバラが咲き乱れ、甘い香りが狂おしいくらいに漂う。

食事の後、クラウディア王妃のハープ演奏が披露されたが、今日はアレグラのお披露目ということもあって、彼女も演奏しなくてはならない。デイビッド王が頷いて、アレグラはしかたなくハープの前に座った。

実を言うと、ダンスはともかく、楽器演奏はアレグラの苦手分野である。一応子供の頃から宮廷における様々な教育を受けてきたが、彼女は、静かに女の子らしいことをするのは不得意としていた。特に、皆に注目される場所での演奏などもつてのほかだ。こういうこともあるつかと覚悟はしていたが、今は恐ろしく緊張していた。先ほどのダンスのときは、アレグラの軽やかな足取りにみんな感嘆していたが、ここで失態を見せればその好印象も台無しにしてしまう。

深呼吸して弦をつま弾き始める。導入部分は滑らかだったが、しばらくすると音が飛び出し始めた。

その時彼女は、滑らかなハープの音色が入ってくるのを耳にした。

「そのまま、続けて」

斜め横にあったもう一台のハープを、ユージーンが弾いている。全く同じ旋律を奏でるのではなく、時には伴奏のように、また時にはアレنجして彼女に合わせている。それはまるで、気のあったハープデュオの演奏だった。アレグラも、彼が加わってから、肩の力を抜いて自分らしく生き生きと競演を始めた。

二台のハープは響き合い、人びとの心を誘う。二人の手は、最後の音を奏でると同時に宙に止まった。観客のほとんどは、それがもとと準備された二重奏だと信じて拍手をおくっていた。

「見事な演奏でございました」

賞賛したのは、総理大臣のアルノ公爵だった。その微笑の裏に何か隠されているように感じるのは、彼がアレグラのハープの腕をからかっているのだろうか。心の読めない人だ。

後で、庭に出てカプリシオーソに乗り、見事なジャンプを披露して称賛を浴びるアレグラを、静かに見守るユージーンの傍に母親のクラウディアが近づいた。

「しょうがない人ね、普通は女のたしなみというものは逆なのだけれど…… あなたも乗馬より楽器が得意で、二人は案外均衡がとれているのかもしれないね」

「彼女は、屈託のない人です。母上にとっても、付き合いやすいことでしょう」

クラウディアは優しく笑いかけた。

婚礼の宴（後書き）

主な登場人物を、第一部の始めに載せました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5243z/>

限りなく僕を高めてくれる王女

2011年12月21日11時54分発行